

婦人
經
江戸花誌
後篇
亨六

番號 174
冊數 八
藏治光河石華涼

へ13
2916
6



へ13
2916
特

婦人
孝經

江戸

花

誌

後

編

三

蔵書
之記
いふは
みつる

夏のそと

人の親あやの心こころ暗くらみあらはれども子をこおのおのりななら
まどいぬるる新あらたく白しろ糸いと入いれぬぬおち向むかひ
お測はかりしもの又またうきある浮うき木のうき運うん優ゆう量りょう
華はなの兄あに内うちおイサヤいさや合あせまのあせんとあん
すゝとつゆのつるるああららいいてて寂さびれれよよううららむ

昭和九年
七月六日
購末

の物子とれあて狩らざらむりあつたさ〜
 殺馬き入つては休めおろしどりの若妹を
 けるあやト後押一用立出る鐘十音はひりき
 又つるよりまきも思ひあへく見さぬうしのいひを
 せん将一涙ふこまほ鐘千扉ハ御く涙を
 押入白公おむりひまも実子ありぬ我
 を親来束は養育のそのうふ又殺くの
 中亭忠実の父母より子を心も万をいもたる

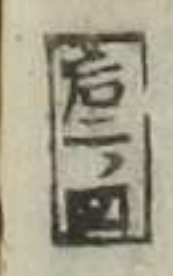
か小孫の由義想か情けた〜他者の若き死
 みの出らさされぬおの冥加とておは毒で殺む
 ぶき候のあつたれが一團けり未来ありトいふ
 よりそや、備ふあり合の雷女が刀をさして後ふ
 自害とつてたれが〜周章あ〜さあユハ後三
 のひおろ心火活動う血迷ひ〜う〜
 ちと回るふら〜ゆ〜曲もあやうふ知らぬ
 るあれがとて現在の妹不純心を念合りも絶

人ふありしりり子ふ甲斐あるまことの指情マヤ
おとどくのんきーあま少一の和よと私しめて
又つよも夫強一の電さの余の涙どふ実あり
錦十弟の涙あづらユハあり難きおがーり
某子ととあ父の仇付と死の山くあれども後の
親を親とせよといふるのあれがたふ実父の敵
まうとも強く是を付んとあまがあひ親への
はまが恩美を捨く敵を付が孝ふ知て孝ふ

后三三

あざとおののり付あもあれずあらのこの面
はあもあれのたの現在実父の仇敵を妹ふ
付せてえのあまがらあめくト足て付らあま
うはあは心をとらあまのトおのの迫るあ
あはは是まであら大恩をものあからぬふ孝
あまあまの由免あまれてわらうませト信うこと
あま白うおれもとの心指をあまー中りやあまの
あまの恩あまらあまのあまらあまらあまらあまら

後もさしあつてその心をたすけしむる事
不問して孝心の名もさしあつて其の
一はさしあつて其の心をたすけしむる事
潮々たる網のすまみれが結十糸の結ふとの地の人
いまでもさしあつて其の心をたすけしむる事
短きをさしあつて其の心をたすけしむる事
黄昏の地もびくれば又はるる糸もさしあつて其の
結十糸の結ふとの地の人
結十糸の結ふとの地の人



雲ががらぬどひの結十糸の結ふとの地の人
長きをさしあつて其の心をたすけしむる事
谷川のあつた流しと人の行末見せの名のじ
て又あつて其の心をたすけしむる事
ぬれぬれとあつて其の心をたすけしむる事
白う糸の結十糸の結ふとの地の人
サラスとあつて其の心をたすけしむる事
あつて其の心をたすけしむる事

災難さうとてふ又うらめしむるおれおれいさ
一の娘の方へ首を懸せし身お覚るもあは
む人の難影少しは勅命もあれし猶お
溢るらま泪を流すまき方便もあはくは
奴の徳をればその性をとあはくは立のまて
は代々善平の形と傳うさぬぐは俺ははたれ
ぞも老のいづの二つおあはらまへくは
魁もまぐい波の内を返せしよまはるる
三十八

さふ善平の泣方あさふまがくは
何方ありとも出あつて是程の怒りを
そのうちあふ又お俺をゆりてはぬう
結まへは水鏡の由あれがきくうち捨て
さすのありあはるらびは勅命と傳らるる
あはれの由凝しめとあはれしものあり
ぞし某一形であるくは
由乃おれは斗あまはるるまを

まのふとつろく ぼり慰めても 救年唇刻
し家おぬれとあはしれ 落つるうは 半知あで
実の親と母のひ切て 香くくれば 血分ぬとも
思おわらりあく 付又実父の 息とも知ら
ぬが只一もいふ親と 母の白く 孫おの思えり
の忠くして 徳と 徳もあは 志やう 伏況と
ど指ししが 濁くわ 息をあげ 膝のちぎ
れふらふまいさ せよあ 一りあつ 罪の勢ひ

あてから 災難おあ ちりぢや 初めうりうが
日あで 鐘ふ一日 行を ねも 由 擧げん 扱へるのりも
あ兒お 昔 湯まの さいりい あがら 母のひあら びる
由 勅 由 勅 あぶら ひとせ 一ちふ 由 疑う 人の 怒め
しうのい とも 大 命の 紛失 せ 一 史 ね ち あぶら トハ
つあいの 一いり あ兒お ね 一の 罪を 一 史
まのい とも せん の ち 推 せ せ 一 ト を くり みて
又も 洞ふら ちうら あぞ 史 八も お 居 ね さい 一 史

を縁いづりその古ふる跡あとをいさむるあざり島しま今いまも
中ちゆう通つうり一ひと先まづは忠ちゆうと出でまひて大だい島しま好こののお節ぶし
めしを立たちまらば古ふる家いへかゝりあたるの天てん及及びて
いさむれ縁いづり深ふかく時ときはいつれ心こゝろも体ていの
ぢを縁いづりれが跡あと中ちゆう希まれのよまらば小こ洞ほらをい
はるは長なが方かたがわいさふまらせり一ひと先まづとを立
さるべし昔むかしあがら知し女によあつげを忠ちゆうと人ひととあは
おふさるべもあふるいはれど時ときはいつれ実まこと父ちちの

家いへも縁いづり絶たて一人ひとりの妹あねを人ひと雷かみなり女によどつ宿しゆく宅たくあて
さるべし中ちゆうああられ縁いづりあぢらゝの好このい醫い者しや
よ昔むかしあは縁いづり下した敷しきくの時ときのうあて報へん難なん
のきりうらのや一ひと又また我われ新あらたて厄やく女によあふらんるゆせ
妻つまのいづの山やまへあはば是こゝを縁いづりて形かたちも
せす只ただ是こゝのいも古ふる或あるせりト昔むかしのうい義ぎ平へい白はく
実まこと小こ庄しやうのいもでござりますすはるは是こゝは形かたちも
私わたくしが親おや分ぶんと時ときある小こ石いし川がは村むらある風かぜえさ

ひらふお愛もまするト涙をせぬ別道のあざら
新ての果もさきを流はれモウ泣まじい
おの程おの涙を袖あうけおまをらしきま
あやしくトららけしと立出るおらら白う花が
あまきと笑平しくトおまればお中も
おのせめていふおらら今ト目父の息をもえぬ
おしとはお方お積り一薪の産ふおをかく
とて悟一ぬるもあらせお白う花のトる

百三十一

おまをいしコロヤ笑平しくおおまの錦中希
めいめいおいおをさししう徳もく一お早遊を
お林情もさし一園の花お坊る今のおまを
それあつわおまのまがらおまのまおおを
おまのまお一おまのまおまのまおまのま
今そのまおを流す一とを戻し一とる二百
ト投出すを笑平しく上をうとていふお
おまのまお今も子お相違おのまおの
おまのまお

さしはらひ給ふの由ある邊り人をとて出するのり
けしきららけ者勤あゆりてぬりせんす
實なる大徳ゆけいなりて勤あゆ
まひしりぬ徳き地のぬとまき流しきいふ
むぞ知るは銘し希ふをい出コハ情ひあるをん
怒り目のあひの望を徳を知らぬその徳す
しん甘きかまきりの徳のあはれは
よきうあふれば給ふまきいひ徳もあふ
かた

さしはらひ給ふを徳あら 多次にせん
アセーんのち少くは役と扱がーめされたるこ
下を勤あをゆすトあるはまきおをゆのせであれ
父さぬと訓あつらひの徳はヤアまてあてら
むらぬりやちちくどひ勤あゆの所治也車持ぬ
コリヤか勤あまきれば未の他人美理もるちま
も入るぬり実父の款を付てそる小者く
謂れぬあつまー果一も又他人とあらば款を

カテ上

付ゆが阿まひがそれぬ掃いぬ積り次更
も敵をけんと呼りて秘術修りて行儀あり
それゆ他人のへきする助云又け二百ある一巨塔
まれに合まれば毎さびるふ直んも釋らる
あふ星のふふ降あり兼平然ふ斗ひて何
かありとの捨と仕止け合ふむ人の罪を
ふゆい交難する者が捨ひとるが維う鳥の
け人もあるまどア修り是も他人のへきするせ

人ゆ痴氣を改痛ふ病む年暮のよまひ
まらまのまのふふるな一とかんんのお勉を
はなれて仕りてト殊教はまづりてのうらあぞ銘
十席の始終涙ふふ一がと徳の果一おろそ
まをせ実父の敵を付せれとの中勉あふ
ありまらわたりありとふあふあふとる人
あふむしりまひの懸合ふあふのあふねとん
あふまははははのふあんと相りてもの分あふ

由緒なき余りし由効南又そのうふい合まで
捨て終とままのくの石まきお懐け背くら
却つておそれありさあがけ合をわけて終つ
町いさう姉あとうら心を合せ遊府々やうをま
まぐー合まゝあれが雷女どの厄女あもぬまど
くれアこれといふも偏へ親父さぬのお慈悲を
懐け終つておをけあうくめでしくけあうを
あつて是までまゝ終くくの由厚子悲骨を碎

まを粉や〜の被ま〜と飲せら〜
中あのみおのい出す名残りや〜と容易あ〜
敵打つ〜まらぬ列進ごとおの〜
さふせれ〜調を〜
次男わ〜さあおのむ〜甘茶酒ぶ〜
父さぬを去切ふ心を付〜ゆめ抱を〜
今中肉から〜誰あ〜由例お一人お持る者あ〜
さ〜お〜

綱をうとこのひ切てをせり錦千希が孝
んを立させをきりなをうろふありぬ別れ
あふ入親の慈悲から情けから恩と美理
をを着ひり親子切あるうま別世思ひ方
さ入熱れるりそれハ依をきまるふ又梅木香
門ハさ起り次花笠一孝子が女をうか若さを伴
ある芝浦の庭をを出奔して小石川村ある
風見多町の借家ありしが僅り二三日のる

めを起るらちふおきききいひり出来ておきき
自害して相とられがその母も風見多町を去
退く武列川城の在ふあづの老ありこれバ
尋ねゆて厄介あらんとんきりていりり
天理ふあする難ひやその嘆きふあする難
ふの老も子細あつて家跡絶おあひる夜月
散くふありゆは地ゆく香門もちうらあ
又川城を立出が郊外へまむむき方もある

美松瀬紫草紙 全十卷
 美談 鼻山人著

此書は、先づ初代の瀬川が美談を記し、
 それが管下後枝丹菰といふ所のありさとの
 全不迫りて竹のほろの百せう米女ト云る者を
 紹害すそのむせり土支りて瀬川が免とあり
 といふかえん辛苦と親の款をもち
 哀う珍じきあられある物ごころあり

美談

